コロナ後の芸術

Art after COVID-19

新見隆

新型コロナウイルス感染拡大で美術館の休館などが相次ぎ、芸術の制作や鑑賞の仕方に大きな影響を与えている。コロナとの共生も求められる中、今後の芸術の在り方について、前大分県立美術館長で武蔵野美術大教授の新見隆さんが文章を寄せた。

世間から一歩距離を置く

藤本由紀夫「岬を見るベンチ」＝豊後高田市

煩わされず「見る」

私も委員として関わった豊後高田市の「花とアートの岬づくりプロジェクト」で、同市見目の長崎鼻リゾートキャンプ場に現代アートの作家藤本由紀夫（大阪市）が「岬を見るベンチ on the border 海を望む、海に臨む」を制作したのは、2018年秋のことだ。お披露目のあいさつで藤本は「地元の人にゆっくりした時間、海や自然に向き合うひとときを楽しんでほしい」と述べ、さらに「現代は鴨長明が京の郊外にこもって『方丈記』を記した13世紀に似ている」とも語った。

13世紀と現代を重ねたのは「天変地異が続出して世の中は混乱し、価値観が大きく変動している」ということだ。「時代や世間に煩わされずに長明のように一歩距離を置いて、世界や世間を睥睨してやろうじゃないか」というメッセージだった。

「出会いを大事に」

藤本の予感は昨年、コロナ禍として的中した。

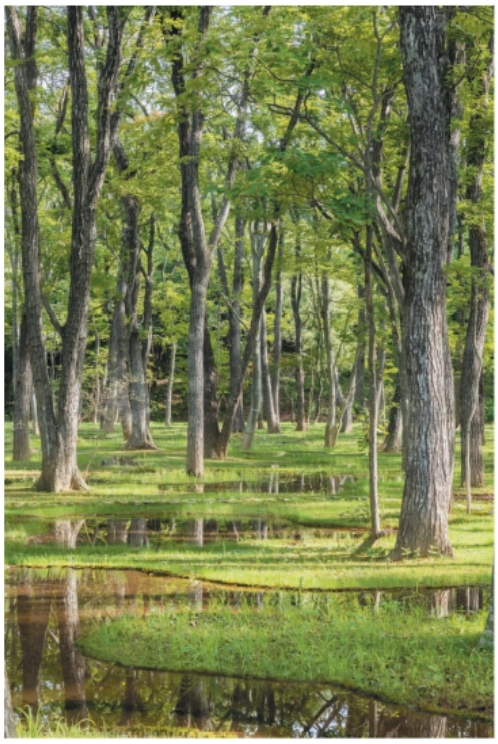
長くテクノロジーに頼り、自然をコントロールできると慢心してきた人類は、まさしく自然から逆襲され、ウイルスを媒介する世間や人間から距離を置かざるを得なくなった。

偶然だが、感染が拡大したのは、私が7年間勤めた県立美術館長を辞め、県地域アート活動エグゼクティブアドバイザーの任期も終了し、東京と大分の往復生活が終わったタイミングだった。

大学ではインターネットを使ったリモート授業をやりながら、家でじっくり本を読み、音楽を聴き、作品を作る〝待望の〟芸術ざんまいの生活が始まった。都心に出ることも少なくなり、家の近所にあるサナトリウムの森で過ごすことも多くなった。そこには、鳥の声や木々の語りかけがあった。そして、栃木県の那須塩原のホテル「アートビオトープ那須」の文化顧問に就き、新しいミュージアムのかたちと文化ツーリズムを試行する生活が始まった。

アートビオトープ那須は、ガラスと陶芸の工房を備えた森の中のレジデンスに、建築家坂茂が設計した宿泊棟があり、各部屋には現代アートや工芸の作品が展示してある。ワークショップを楽しみ、満月の夜には、おいしい料理を食べて、建築家石上純也による自然の庭「水庭」を散策する楽しみ方もできる。水庭は渓流から水を引いた小さな池を160個設置し、周りに落葉樹を植樹した人工の庭だ。

「現代アートの生け花」と言った人もいたし、私には自然を使った新しいコンセプチュアルアートにも見える。



石上純也「水庭」＝栃木県

苦闘糧に新しいもの模索

藤本由紀夫のベンチも石上純也の水庭もコロナ禍の芸術の在り方「アート・ライフ＝1人静かに、離れて生きる、離れて見る」「時に人に出会って、貴重な出会いを大事にする」を示唆しているのではないか。それは長明の方丈記的生活にも通じる。コロナ禍は大変な受難であり、亡くなった人や苦しんでいる人、苦闘している人のために祈りたい。しかし、それを糧に新しいものを模索する試練と挑戦も与えられてもいる。

c大分合同新聞社　無断複製転載を禁じます。